

令和7年度一般選抜試験

学 力 試 験

数学，物理，化学，生物，日本史， 世界史，英語，国語

令和7年1月25日 9時30分—11時30分

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 各科目の問題は下記のページにある。

科目名	数 学	物 理	化 学	生 物	日本史	世界史	英 語	国 語
ページ	3～7	8～11	12～16	18～25	26～30	31～37	38～48	49～63

国語は順序が逆で63ページ(国語1)から始まり49ページ(国語15)で終わるので注意すること。

- 3 出願時に届け出た2科目の問題に解答すること。これに違反した解答は無効とする。
- 4 解答には黒鉛筆、黒色シャープペンシル又は黒色ボールペンを使用すること。
- 5 解答は解答用紙の所定の解答欄に記入すること。
- 6 解答用紙の指定欄に志望学科・コース、受験番号、氏名を記入すること。
- 7 解答の記入の仕方については、解答用紙並びに問題の初めに書いてある注意に従うこと。
- 8 本冊子の余白は計算・草稿用に使用してよい。ただし、切り離さないこと。
- 9 試験時間内の答案提出、退室は認めない。
- 10 問題冊子及び解答用紙は、全て回収するので持ち帰らないこと。

学 科 ・ コ ー ス		受 験 番 号						氏	
								名	

上欄に志望学科・コース、受験番号、氏名を記入すること。

国語

問題〔一〕～〔四〕のうち、「〔一〕は必ず解答すること。また、〔二〕～〔四〕のうち二つを自由に選んで解答すること。」
なお、問題の中で字数が指定されている場合は、特に指示のない限り、句読点等を字数に含めること。

〔一〕 次の文章を読んで設問に答えよ。

情報の発信者の脳内には、他者に伝えたい「情報」があるとまず考える。この「情報」は最初かたちをもっていないと前提しておく。そう前提すると「かたち」を与えるためのなんらかのプロセスがあることになる。

言語によってこの「情報」にかたちを与えるプロセスを「言語化」と呼ぶことにしよう。そうすると視覚でとらえることができる映像によってこの「情報」にかたちを与えるプロセスは「視覚化（映像化）」ということになる。「言語化」も「視覚化」の一つであるとみることができ、今ここでは、両者は別のプロセスと考えることにする。「視覚化」も、（現代はいろいろな方法があるが）かつての絵画作品のように「手で描く」場合と、写真や映画のようになんらかの機材を使う場合とに分けることができる。映画が言語と無縁ということではない。絵画や写真と言語とのかかわりは、むしろ濃密で、「絵画・写真・言語」のかかわりについて考えることは一つの大きなテーマとなるが、今回は「言語化」に絞って話を進めていきたい。

発信者は自身の「気持ち・感情・感覚」を内包した「情報」を言語化しようと思っているとしよう。「内包した」と表現したのは、「気持ち・感情・感覚」がそのまま、いわばストレートに言語化されるとは限らないと思われるからだ。「気持ち・感情・感覚」を核としてそのまわりに、なんらかの他の「情報」が附加①されていることもある。

例えば、詩人の萩原朔太郎（一八八六～一九四二）は、「詩の表現の目的」は「感情そのものの本質を凝視し、かつ感情をさかんに流露させることである」と述べている（『月に吠える』序）。「気持ち・感情・感覚」を言語化しようとすることによって、自身の「気持ち・感情・感覚」がどういうものであるかという、その「本質を凝視」するという段階、プロセスがあることを意識している。感じていることをすぐに口に出す、ということではないことには留意しておきたい。思ったことをそのまま言うのがなぜ悪い、思ったことは事実なのだ、という場合には、②「気持ち・感情・感覚を凝視する」というプロセスがないので、「生体反応」にちかい。「うるさい」と感じた瞬間に「うっせえわ」と怒鳴るのはまさしく「生体反応」だろう。

「感情をさかんに流露させる」の前には「かつ」がつけられており、朔太郎は「凝視」というプロセスを経て、その後に「感情をさかんに流露させる」という順番があるとみている。言語化されていない、発信者の脳内にある「気持ち・感情・感覚」は言語化されていないのだから、かたちをもっていない

い、不定形なものだ。その不定形なものに、言語でかたちを与えるのが言語化であるが、どの語によってかたちを与えるか、どのような言語表現によってかたちを与えるか、を考える必要がある。「気持ち・感情・感覚」を言語化しようとしているのだから、その時には「何を言語化しようとしているか」は決まっている。ただし、その「何」がまだかたちをもっていない。ここに「気持ち・感情・感覚」の言語化の難しい点がある。この「気持ち・感情・感覚」を伝えたい、しかしその「気持ち・感情・感覚」をどう言語化すればいいかはまだ決まっていない。その際には、この語で言語化するのがいいか、この表現で言語化するのがいいかという「言語と気持ちとの照らし合わせ」が必要になる。その「照らし合わせ」も「言語」によって行なうしかない。このように、「気持ち・感情・感覚」を言語化するにあたっては、自身の気持ちにぴったりかどうかという振り返り、検証を慎重に丁寧に行なう必要がある。

しかしまた、言語によって、自身の気持ちにレッテルを貼り、レッテルを貼ることによって、自身の気持ちはそうか「憂鬱」なのだ、とか「恋情」なのだとか「嫉妬」なのだとかわかる、納得するということもある。③自身が言語によって自身の気持ちを確認するプロセスといってもよいかもしれない。レッテルを貼ることができるのは、自身の気持ちを大きく抽象化できる場合で、大きな抽象化であるから、比較的単純な言語化、「回収」のしかたともいえよう。「鬱屈」した気持ちを「重たい空気」と表現すると、自身のこの「なんともいえない気持ち」を「重たい空気」という言語表現によって「象徴」したことになる。例えば、「重たい空気」というタイトルの詩をつくって、「なんともいえない気持ち」を詩的言語として表現するということだ。その詩作品は「象徴詩」ということになる。右の説明は「なんともいえない気持ち」を「鬱屈」とみなし、その「鬱屈」をさらに「重たい空気」と表現し換えてから「鬱屈」をはずして、「なんともいえない気持ち」を「重たい空気」と表現するというプロセスの説明となっている。そうではなくて、「なんともいえない気持ち」を（「鬱屈」という語を経由しないで）「重たい空気」といきなり表現することもあるだろう。

右では、「鬱屈」のような、「気持ち・感情・感覚」をあらわす一語を「レッテル」と呼んでみた。「レッテル」がある程度蓄えられていくことによって、その「レッテル」を媒^aカ^aイとして、簡単には「レッテル」を貼ることができないような複雑な「気持ち・感情・感覚」が言語化できることもある。しかし、そもそも「レッテル」を貼りにくい、複雑な「気持ち・感情・感覚」なのだから、ある程度「レッテル」が蓄えられてくると、なんとか言語化しようという^b紆余^bキヨク^cセツ^c、プロセスを放^dキ^dし、省いて、安^eイ^eに「レッテル」による言語化をする、ということも考えられる。「レッテル」側に先回りして、そちら側から自分の複雑な「気持ち・感情・感覚」をみる、といってもよい。

自身の「なんともいえない気持ち」が「鬱屈」なのだ、と表現することは、「鬱屈」という語が「なんともいえない気持ち」の象徴であるとみることもできる。

レッテルを貼ることで納得し落ち着くこともある。しかし、レッテルを貼ることによって、無理に自身の気持ちをかたづけしてしまうこともあるかもしれない。かたづけるためにレッテルを貼ることもあるだろう。気持ちがあつて、それを表現する語がある、語によって気持ちを整理する、④「気持ち」が先

か言語が先か」という循環的な状況がうまれてくる。

レットルが貼れない複雑な気持ちも当然あるはずで、それを言語に丁寧に移し換えていくと、詩ができあがるかもしれない。朔太郎の詩作品はそのような、複雑な「気持ち・感情・感覚」を言語化したものと思われる。

自分が「他者に伝えたいこと」を「情報」と呼ぶことにしよう。その「情報」は「明日は授業を休む」というような「ことごら」を主とする「情報」と、「明日は大学に行きたくないなあ」というような「ことごらと感情」が入り混じった「情報」と、「戦火に苦しむ人を見ると悲しい気持ちになる」というような「感情」を主とする「情報」とがあるだろう。

「ことごら情報」であっても、「感情情報」であっても、「何を言語化しようとしているか」は（ほぼ、にしても）決まっている。「A」は「B」よりも言語化しやすいので、「明日は授業を休む」ということはすでに「情報」としてまとまっている。しかし、より重要なのは、「何を言語化しようとしているか」ではなく、「どのように言語化するか」であろう。絵画作品であれば、「何が描かれているか」ではなく、「どのように描かれているか」に注目するということだ。リングが描かれている絵ですね、ではなく、そのリングがどのように描かれているかを注視しようということだ。

そう考えた場合、「C」の言語化よりも「D」の言語化がより困難の度合いが強いことになる。筆者は、文・文章を書くにあたって、詩的言語をよむ、ということが重要であると考えている。それは、右のようなことが予想されるからであって、「E」よりも複雑であると思われる「F」がどのように言語化されているか、どのように言語化することができるか、ということをご丁寧に「よむ」ことによって、言語の可能性を、自身の経験としてつかむことができる。そのことがきわめて重要だと考えている。

（今野真二『鬱屈』の時代をよむ』による）

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直した時、最も適切なものを次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「カイ」	ア 回	イ 会	ウ 介	エ 改	オ 解
b 「キョク」	ア 局	イ 極	ウ 巨	エ 拳	オ 曲
c 「セツ」	ア 折	イ 節	ウ 切	エ 説	オ 接
d 「キ」	ア 来	イ 棄	ウ 記	エ 着	オ 機
e 「イ」	ア 位	イ 依	ウ 異	エ 易	オ 違

問二 傍線部①「萩原朔太郎」と同年代（大正～昭和初期）に活躍した詩人を次のア～カの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア 室生犀星	イ 村上春樹	ウ 工藤直子
エ 石垣りん	オ 谷川俊太郎	カ 高村光太郎

問三 傍線部②「『気持ち・感情・感覚を凝視する』というプロセス」を説明した内容に当たるものを本文中から十四文字で抜き出し、答えよ。

問四 傍線部③「自身が言語によって自分の気持ちを確認するプロセス」の説明について文末を「ということである。」にした形で、三十五文字以上五十文字以内でまとめて答えよ。その際、「レットル」「気持ち」という語句を必ず用いること。ただし、「ということである。」は文字数に含めない。

問五 傍線部④「『気持ち你先か言語が先か』という循環的な状況がうまれてくる」理由として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「鬱屈」という「気持ち・感情・感覚」は言葉を知ることによってようやく気持ちの自覚をもたらし、納得して気持ちが落ち着くという状況がもたらされることがあるため。

イ 他者に伝えたい情報である自己の「気持ち・感情・感覚」を理解するためにはまず言語化することが重要であり、他者との気持ちの受け渡しが続けられながら深まっていくため。

ウ レッテルを貼るといふ言語化は気持ちと言葉をつなげるために必要な抽象化であり、言語化できない場合も気持ちと言葉をつなげる挑戦をし続けることが重要であるため。

エ 気持ちを言葉で表現する場合もあれば言葉が先に表出されることによって気持ちを理解する場合もあり、この繰り返しによっても納得の度合いが増すことがあるため。

オ 自分の複雑な気持ちをすぐに言葉で表現することは難しく、言語化の体験をしながら納得し落ち着くということは何度も行いながらも表現することができない場合もあるため。

問六 空欄 A 〽 F に当てはまるものを次のア・イの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を何度用いてもよい。

ア ことから情報 イ 感情情報

問七 本文の主張と合致しているものを次のア～カの中からすべて選び、記号で答えよ。

- ア 「言語化」と「視覚化」は、「気持ち・感情・感覚」を「内包した」プロセスの有無によって大きく異なっている。
- イ 他者によって言語化された「レットル」を貼られることにより、自分の気持ちにぴったるかどうかの振り返りができる。
- ウ 詩的言語を丁寧な「よむ」ことは、複雑な「気持ち・感情・感覚」の言語化を自分の体験としてつかむことを可能にする。
- エ 「なんとも言えない気持ち」は「鬱屈」という語を経由することにより、「詩的言語」としての表現の可能性を持つこととなる。
- オ 「何を言語化するか」より「どのように言語化するか」に注目し、気持ちを言語に丁寧に移し換えていくことが重要である。
- カ 他者に伝えたい「情報」には「ことがらと感情」があるため、複雑に絡み合っていることを前提に慎重に検証を行なう必要がある。

〔二〕

次の文章を読んで設問に答えよ。

かつて心的外傷の忘れられた歴史を書いたとき、『心的外傷と回復』のなかで私は、傷つけられた人々の苦しみはただ一人ひとりの心の問題であるだけ^①でなく、社会正義への問いかけでもあるのだと述べた。

暴力とは誰かを支配し抑圧することを狙う行為である。だから外傷に気づくことは、その外傷に名をつけることは、抑圧に抗^{あが}ってきた人類の歴史と深く結びついている。私たちが宗教ではなく民主制をめざしたこと、奴隷制の廃止をめざしたこと、女性解放をめざしたこと、戦争のない世界をめざしたこと。これらすべての歴史である。

ベトナム帰還兵がホワイトハウスに従軍メダルを投げつけて抗議するまで、心的外傷後障害（PTSD）は正当な診断ではないとされていた。帰還兵の心はベトナムの戦場に縛り付けられたままであると彼らが証言したことで、はじめて心的外傷は認められたのだ。そして同じように、女性解放運動によって声をもった女性たちがレイプ、家庭内暴力、近親姦^{かん}について証言したことで、それが蔓延^{まん}していかも秘匿^{ひたく}されていると証言したことで、はじめて性暴力が全世界的疫禍として認められたのだ。

^③ 外傷後障害が力を奪われた人々の苦しみであるなら、回復とはその人々に力を与えることであるはずだ。心的外傷が誰かを辱めて孤立させるものであるなら、回復はコミュニケーションへの復帰を通じて行われるはずだ。この二つが、私の考える治療の根本原則である。文化を超えて、時代を超えて妥当な原則であると私は信じている。

『心的外傷と回復』のなかで私は、回復のプロセスを三段階のものとして記述した。

第一段階ではまず安全を確立すること、さらなる暴力を受けずにいられる状態を作らなくてはいけない。安全な場に入ることによって恐怖から距離をとり、自己決定の感觸 sense of agency を取り戻せる。暮らしのなかで自分をコントロールできる感覚、自分で選ぶことができる感覚は次に進むための前提条件とわいていい。(警察や司法による善意の介入がときに被害者の傷を一層深くしてしまうのも、この点にかかっている。介入の方法によっては自己決定が損なわれてしまう。逆に、被害者を尊重しつつ力を与えるような介入であれば回復をより確実にすることができる。)

第二段階は過去を再検討することである。外傷を追悼し、それに意味を与えるためだ。外傷事件をなかつたことにはできない。しかし追悼によって新しいアイデンティティーを鍛造することができる。過去にあったことを否定するのではなく、過去に未来のすべてを規定させるのでもない、つまり新しい自分を得ることである。

回復のプロセスを調べた研究は数多いが、驚天動地の事実が明らかになるわけではない。直観される通りのことが裏付けられていく。コミュニティから支援があれば良い予後の得られる見込みが大きくなる。反対に、コミュニティからの疎外は毒になる。孤独であるとき安全を感じることはできない。過去に意味を与えること、追悼することも、やはり孤独であるかぎり難しい。

回復の第三段階まで到達できれば、生き延びた者はあらためて現在と未来に目を向けられるようになる。過去を悼むことは果てない作業に思われるかもしれないが、かならず終わりはやってくる。その後にはより広いコミュニティと交わるようになり、可能性の手応えに気づく。ときに回復者は、自分の味わった苦難がもつと大きな社会課題の一部分であることを理解して、自分のかつて負つた心的外傷の意味を組み換えていく。みずからの経験を誰かに差し出すことによって、あるいは、より良い世界をめざす誰かと協働することによって。かつてロバート・J・リフソンはこれを「生き延びた者に課せられた特殊任務 survivor mission」であると書いた。何十年にもわたって、この三つの階段を上っていく患者たちの証人として、そして同盟者として立ち続けたことを私は誇りに思っている。

しかしこの数年間を生きていて、回復にはもう一つ最後のステップ、第四段階があるのではないかと、私は考えるようになった。——正義 justice である。

暴力の生態系によって心的外傷は生じる。暴力の生態系とはすなわち、劣位におかれた人々に対する犯罪がいかに正当化され、受忍すべきものときされ、不可視化されるかである。暴力を振るう人間、搾取する人間によってだけ被害者は傷つけられるのではなく、「まわりのひと」のやつたこと／やらなかつたことによって傷は深くされる。つまり共謀した人たち、知らないふりをする人たち、被害者を責める人たちのやつたこと、やらなかつたことによって。社会のあり方から心的外傷が生じている以上、そこからの回復も、個人の^{プライベート}問題ではありえない。個々のコミュニティにある不正義によって外傷が生じているなら、傷を治すためには、より大きなコミュニティから対策を引きだして、不正義を修復しなくてはならない。

回復していく途上、難しい問いがさまざまに浮かび上がってくる。

皆の前でこのことを話せるか？

真実を、周りのひとは受け止めてくれるだろうか？

この傷は治るだろうか？

そのために何を差し出さなくてはならないのか？

どうして加害者と同じコミュニティに所属しつづけないといけないのか？

和解は可能か？

どうやって？

コミュニティはどうすれば現在の、そして将来の被害を防げるのか？

この問いに答えるため、私はもう一度、話を聞くことにした。生き延びたものたちの声である。皆のための、より良い正義を求めることのために本書はある。暴力を生き延びた人——誰も直視しよとしなかった真実を骨身から知っている人こそが正義についての新しい理解を導いてくれるのだと、私は主張したい。最初にやることは、生き延びた人に真摯にまごころ訊ねることだった。「どうなることが正しいと思いますか」と。聴くことはこのとき、ラディカルな営みである。

(ジュディス・L・ハーマン著、阿部大樹訳『真実と修復 暴力被害者にとっての謝罪・補償・再発防止策』みずす書房による)

※ 本書…本文の出典を指す。

問一 傍線部①「社会正義への問いかけ」でもある理由を説明している段落を本文中から一つ探し、その始めの五文字を答えよ。

問二 傍線部②「外傷に名をつけること」のきっかけになるものを示す言葉を次のア～カの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア 抗議 イ 対策 ウ 和解 エ 証言 オ 運動 カ 回復

問三 傍線部③「外傷後障害が力を奪われた人々の苦しみであるなら、く行われるはずだ」で使われた表現技法に当てはまるものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 呼びかけ イ 対句 ウ 倒置法 エ 擬人法 オ 体言止め

問四 傍線部④「過去に未来のすべてを規定させる」具体例に当たる箇所を本文中から二十六文字で抜き出し、その始めの五文字を答えよ。

問五 本文の内容に合致しないものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えよ。

- ア 回復のプロセスの第一段階は安全の確立によって、恐怖から距離を取り、自己決定の感触を取り戻せることだ。
- イ 回復の過程で過去を再検討することで得た新しいアイデンティティーは、警察や司法の介入によって、外傷を追悼することだ。
- ウ 回復の過程で過去を悼む作業によって、より広いコミュニティと交わるようになり、自分の味わった苦難がもっと大きな社会問題の一部であると理解する。
- エ 暴力の生態系によって心的外傷は生じ、劣位におかれた人々に対する犯罪は正当化され、不可視化される。
- オ 個々のコミュニティの不正義によって外傷が生じているなら、より大きなコミュニティに所属を移動することが必要だ。

〔三〕

次の文章を読んで設問に答えよ。

振り返れば、五月のオバマ大統領の広島訪問では、日本じゅうが歓迎ムード一色に染まり、老いた被爆者を抱きしめる大統領の姿に感動したのだった。しかし、その歴史的訪問の実態とは、原爆資料館（平和記念資料館）をわずか十分ほどで通り過ぎ、原爆投下について遺憾の意を表明することもなく、世界に向けて核兵器廃絶の理想を語っただけではないか。謝罪は政治的に無理でも、核兵器廃絶を詠うのなら、オバマ氏はせめて時間をかけて資料館の展示に見入るぐらいのことはすべきだったのではないか。

とまれあの日、広島のごにも怒りの声一つなかったことこそ、まさに歴史的な出来事だったかもしれない。そう、人類史上初の原爆投下に対する被爆地の怒りは、すでにこの国から消えてしまったということなのだ。

二〇一六年八月のいま、七十一年前の戦争を直に体験した元兵士たちはゆうに九十を超え、学徒勤労動員で軍需工場に送られた国民学校の元生徒たちも、すでに八十代半ばとなった。当初は鮮明だった彼らの記憶も、年月とともに確実に細部が失われて切れ切れになり、人の記憶の常として、その一部は変形したり、さまざまに書き換えられたりしていることだろう。それに、同じ戦争であっても兵士と学徒、内地と外地、送られた戦地などによって状況は大きく異なっていたことを考えると、たとえ体験者であっても、そもそも戦争の全体像などは捉えるべきがないのである。

これを言い換えれば、^①どんな戦争も、国民の物語として公に語り直されて初めて「歴史」として定着するということである。かつての八紘一宇や五族協和の例を見れば、国家や為政者が語る物語はときに国の行く末を過つ危うさも孕んでいるが、一方で、国民の物語としての「歴史」は自然発生することはないし、公に語られない限り、どんなに大きな出来事もいずれ年月に埋もれてゆくことになる。ちなみに戦後の日本は、占領期と東西冷戦という複雑な内外の情勢があったおかげで、過去の戦争を自発的に総括して国民の物語を語るということができなかった。その代わりに、現行憲法をもって戦争の総括の代替とし、国民の物語としてきたのだと云ってよい。

戦争が公の物語になることのなかったこの国では、復興期とそれに続く高度成長時代に、個々人の直接の戦争体験もまた出口を失ってゆくほかなかつたが、それでも戦争の記憶は、一九六五年から毎年八月十五日に日本武道館で開かれてきた全国戦没者追悼式や、それに先立つ八月六日の広島市の平和記念式典、九日の長崎市の平和祈念式典などによって、私たちの社会に A 留まり続けた。

そうして全国戦没者追悼式も原爆の日も、いつしか日本の夏の風景の一つになったのだが、風景となった戦争の記憶は、もはやそれが実際にはどのようなものであったかを一切語らないし、そこにあったはずの悲惨や苦しみをすでに漂白されて跡形もない。私たちは今日、広島市の原爆ドームを見ても、あるいは沖繩の洞窟にいまなお残る遺骨を見ても、一定の厳肅な気分を味わいはするが、恐怖を感じることはないのだ。

このように、私たちが「過去の戦争」とか「戦争の記憶」と呼んでいるものは、爆弾の雨も、その下の阿鼻叫喚もちぎれ飛ぶ肉片もない、どこまでも

具体性を欠いたあいまいな記号でしかない。そして二十一世紀のいま、公の物語がないゆえの全体的な知識の欠如と無関心の下で、戦争の記憶自体が明らかに変質し始めているのである。

たとえば最近、若い作家たちが過去の戦争を積極的に小説の題材にし始めているが、刊行年を知らなければ、終戦から間もない時期に書かれたと見紛う、それっぽさではある。戦争の本態は、体験者であってもその全体像を言い当てられない多様性にあるが、現代のインターネットには個別の体験談や情報だけは山のように溢れているし、記録映像も豊富にある。すなわち、戦争を知らなくても、その気になれば誰でも戦争もどきを描けるのが現代なのだが、そうして提示されるのは全人格的身体体験としての戦争ではない、いわば精巧なバーチャリアリティである。そのため、そうして新たに描かれる戦争は、ときに軽快な謎解きゲームの道具立てになったり、ある種の抒情の背景になったりもする。

もちろん、現代の人間が過去の戦争を表現しようと思えば、すべて創作になるほかないが、あえて戦争と向き合う強固な内的必然を欠いたまま、過去の戦争はこうしていまや目新しい素材として再発見され、器用に消費されてゆくのである。この文芸の一つの風景は、オバマ氏の広島訪問に誰一人違和感を訴えなかったこの国の「いま」に重なる。

そして、私たち日本人の心身において、過去の戦争が実質的な意味を失って記号と化したことは、日本社会の鮮明な意識の変化となって現れている。戦後日本の平和への決意と一つであった現行憲法を否定し、その書き換えを目指す現政権が、有権者の圧倒的支持を得ていることがそれである。自民党の改正憲法草案では、前文の冒頭に「日本国」が置かれ、国民は誇りと気概をもって国と郷土を守るものとされている。そこにはもはや過去の戦争は影もかたちもなく、代わりに「長い歴史と固有の文化」や「良き伝統」をもつ「我が国」が出現しているのだが、これも **B** を欠いたバーチャリアリティだろう。

かくして私たちの心身からは、いわく言い難いものとしての複雑きわまりない歴史への眼差しが消え、国家の為す戦争への絶望の記憶が消え、爆弾で吹き飛ばされる生身の身体への想像力が消えた。このことは、裏を返せば **C** も消えたことを意味する。そして代わりに、過去の戦争も憲法の条文もバーチャリアリティとして再生・消費され、それを自然に受け入れる国民が大勢となった。これは風化ではなく、まさに変化と呼ぶべき事態だろう。戦後七十一年にして、私たち日本人はいつの間にか、まったく新しい地平に立っているのである。

(高村薫『作家的覚書』による)

問一 傍線部①「どんな戦争も、国民の物語として公に語り直されて初めて『歴史』として定着する」とあるが、日本における戦争についての国民の物語を指す言葉を本文中から四文字で抜き出し、答えよ。

問二 空欄 A に当てはまる最も適切な語句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア かるうじて イ 奇しくも ウ あえて エ 思いがけず オ 容易に

問三 傍線部②「戦争の記憶自体が明らかに変質し始めている」の説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア オバマ大統領の広島訪問に対する怒りや違和感を誰一人訴えなかったことが表すように、戦争を直に体験した人々の高齢化が進み、年月とともに戦争の記憶が薄れてしまったということ。

イ 戦争を知らない若手の作家が戦争を題材に創作活動を行っていることが表すように、現代のインターネット社会においては、戦争体験者の記憶に頼らずとも、戦争に関連する情報や証言、映像などが簡単に入手できるようになったということ。

ウ 戦争に関連する式典が風景と化し、また、時に消費の対象となっており、全人格的身体体験として把握されるべき戦争の記憶がまるで記号のようになり、怒りや恐怖、平和の訴えが見いだせなくなったということ。

エ 日本において、国民の物語としての戦争が公に語られなかったことが表すように、戦争を知らない現代の人々への戦争の記憶の継承が必ずしも効果的になされておらず、過去の戦争が刻一刻と風化しているということ。

オ 戦後の国内的・国際的状況によって個人個人の身体的経験としての戦争が次第に語られなくなったことが表すように、戦争の記憶は国内外の政治情勢によって大きな影響を受けてしまうということ。

問四 空欄 B に当てはまる最も適切な語句を本文中から四文字で抜き出し、答えよ。

問五 空欄 C に当てはまる最も適切な語句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 複雑化する政治的状况 イ 為政者が語る戦争の物語 ウ 風景となった戦争の記憶 エ 平和への切実な希求
オ 消費の対象としての戦争文芸

〔四〕

次の文章を読んで設問に答えよ。

自然が客観的な真理となり、社会が人から切り離されて客観的事象となっていく（中略）。その過程で、人間の経験は科学的知見から切り離された。ところが客観化の流れが拡大し、人間の経験までもが客観的に記述されようとする。

心（魂、自己）についての探究は、西欧に絞っても少なくともプラトン以来二五〇〇年の歴史を持つ。哲学における心（魂、自己、意識、主観性）の探究は、自分自身についての観察によって成り立っている。つまり「心」については自分の経験をもとに探究されてきた。近代の哲学の出発点であるデカルトが「我思う故に我あり」と書き留めたのは、確実な知の基盤を、自分自身が思考することを自分で意識できる、という内省に求めた営みだった。内省を中心に発展した西洋近代哲学は、経験から切り離された、確実性を持つ「自己」を哲学の基盤に据えようとした。デカルトの「我思う故に我あり」も、うつろいゆくあやふやな私の経験のことではない。経験がどう変化し、あるいは夢や幻覚におちいって不確実になったとしても、悪い霊に騙されて間違った思考をしているのだとしても、考える、という運動そのものはたしかに存在する。不確実な経験からは切り離された、確実に存在する思考の確保こそが、デカルトにおいては問題となっていたのだ。

「我思う故に我あり」という確実に存在する自己を起点としつつ、世界を認識する主観性の構造を考察するという仕方で近代の哲学は発展した。世界から切り離して確立された「自己」が確保されたからこそ、世界を客観として眺めることもできるようになったのである。

これ以降の哲学の流れにおいても、哲学における「自己」「主観性」の探究の多くは、それらを経験から切り離そうとする方向性を持っていた（例外はデイヴィッド・ヒューム「一七一―一七七六」にはじまる経験論哲学である）。経験から切り離された認識主体としての「自己」があるからこそ、経験から離脱した客観としての世界や社会も探究できると考えたのだった。ところがこの流れが心理学の登場とともに変化する。

心や自己を客観的にとらえようとする実験心理学は、一八七九年にヴィルヘルム・ヴント（一八三二―一九二〇）がライプツヒ大学哲学部に心理学実験室を開設した年にはじまった。ただし、一九世紀末の実験心理学の黎明期においては、核となる自己の探究の補助手段として、実験が行われていたに過ぎなかった。高橋滯子の『心の科学史』によれば、ヴントの個人心理学は「内観」による「私秘的な意識過程の分析過程」を探究するものである。著者の高橋は「実験」が、ヴントの場合、内観的方法に先立つ予備的操作としての、きわめて特殊な意味しか持たなかった「点に注意を促している」ところが、ヴントの弟子の世代になったときに、実験により客観的に捉えられたデータこそが「心理」そのものであると見なされるようになる。研究者の内省ではなく、実験で測定された被験者の「心理現象」が学問の対象となるのだ。

その後、二〇世紀にはいって行動主義心理学が登場するとこの傾向は徹底する。内省は使われず、「被験者はもはや自分自身の内面の「観察者」ではなく、与えられた刺激に反応する一個の被験「体」にすぎなくなっている」。つまり心理学が対象とする「心」は、単に測定しうる刺激に対する反応を

意味するものになるのである。心理現象とは単なるデータなのだ。高橋は続けてこう書いている。

このことは、たとえば視覚の実験がおこなわれる暗室内でのブザーや言語を用いての応答も、実験者^レと被験者^レという二人の人間の間で取り交わされるコミュニケーションではなくなったこと、すなわち、被験者が自ら見聞きした（自ら経験しつつある）ことがらを実験者に知らせるための^レ合図^レではなく光や音などの刺激に対する被験者^レ体の^レ反応^レ（身体的応答）の一種にすぎなくなったことを意味している。そこでは実験者だけが唯一の観察者であつて、また、その実験者が観察している対象は、そこにいる被験体が示す^レ声を出す^レとか^レブザーを押す^レなどの身体的反応の数々だけである。

日常生活において、人の「心」は誰かとのコミュニケーションをとおして「私の心」「あなたの心」として浮かび上がるものである。心と呼ばれる現象は、私からあなたへ、あるいはあなたから私へという交流の現場で生じる。ところが実験心理学においては、人工的な実験のセッティングにおける刺激や問いかけに対する「反応」が「心」であるときみなされ、人間同士のいきいきとしたコミュニケーションは視野から消える。被験者が「声を出す」ことも、心情表現ではなく、ブザーと同じような身体反応としてとらえられるのだ。たとえば「怒り」は脳画像のような計測可能な感情として問題になるのであつて、怒りを引き起こしたあなたと私のあいだの人格的交流は問題にされない。しかし怒りとは何らかの理由があつてあなたから私へ向けられる出来事であり、本来は計測されるものではない。

行動主義心理学では、研究対象となるのはあくまで客体化された心理現象であり、人間が被験者であつても問題になるのは事物的な反応に限られる。社会的文脈やその人その他の人との人格的な交流は度外視されるのだ。現在非常に発達している認知科学や脳神経科学も、（測定に用いる機器は格段に進歩したとは言え）研究の基本的な構えにおいては行動主義心理学と変わらない。心はあくまで刺激に対して反応するデータとしてとらえられるのだ。

（村上靖彦『客観性の落とし穴』による）

問一 傍線部①「我思う故に我あり」において「我思う」が「我あり」の根拠になるとデカルトが考えた理由にあたる箇所を「」があるために続くように本文中から十二文字で抜き出し、その始めの五文字を答えよ。

問二 傍線部②「西洋近代哲学」が「経験」を切り離れた理由について「」であるから」に続くように本文中から漢字三文字で抜き出し、答えよ。

問三 傍線部③「客体」について、次の(1)・(2)に答えよ。

(1)「客体」の対義語を本文中から漢字二文字の熟語で抜き出し、答えよ。

(2)「実験心理学」で「客体」となるものを次のア～オの語句の中からすべて選び、記号で答えよ。

ア 実験者 イ 観察者 ウ 私の心 エ あなたの心 オ 声を出す人

問四 本文の内容に合致しないものを次のア～カの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア 「我思う」は、考える運動そのものであり、たしかに存在する。

イ 「自己」は世界から切り離され、離脱したため、あいまいな存在となった。

ウ ヴントの行う〈実験〉は、あくまで予備的操作として位置づけられた。

エ ヴントの弟子の世代では、実験で測定された被験者の「心理現象」を学問の対象とし、それを踏まえて研究者の内省が行われた。

オ 視覚の実験では、暗室で、被験者が見聞きした事柄を実験者に知らせるための合図がブザーを押すことである。

カ 人工的な実験のセッティングでは、「反応」が「心」とみなされるが、日常生活での人の「心」は誰かとのコミュニケーションをとおして浮かび上がる。